

創業者の事など

株式会社宮崎合名社代表取締役
宮崎 瓦^{わたる}氏



山形市は昔から「映画のまち」と言われています。作家藤沢周平さんは自伝的エッセイ『半生の記』の中で、「山形師範の正門を出て県庁の方へ歩くと、やがて左に曲がる道に出る。その道を南に行くと交差点に出て、そのあたりが映画館街になっていた…。私は一時期、毎日毎日門を出て映画館に通い、新作が入ると時には授業をサボって1日1館ずつ見て回った。すると6日で一巡してしまうので、7日目にはもう一度最初の映画館に入り直して2回目を見た。毎日毎日形容詞ではなく事実だった」と振り返っています。

藤沢さんが山形師範学校時代の昭和21年から24年のころですから、「わが青春に悔いはなし」、「素晴らしき日曜日」、「酔いどれ天使」といった黒澤明の作品をはじめ、日本映画の黄金期のはしりともいべき時期でした。藤沢さんが足繁く通った映画館は「旭座」「紅花劇場」「演芸館」、「霞城館」などで、宮崎合名社の創業者で私の祖父宮崎

章が経営に携わったものです。

日本において活動写真(映画)が制作されるようになったのは明治時代の末頃で、祖父は千葉県に生まれ、東京・松竹映画に入り映画の配給事業を担当、福島、山形、秋田など東北をエリアに松竹のフランチャイズ化に走り廻っていました。1917(大正6)年に山形に居を構えて、それまでは芝居小屋だった「旭座」、「演芸館」を県内初の映画の常設館にし、山形市北大火の灰燼(かいじん)から立ち直ろうとする市民を大いに励ましたということです。これも県内初となる自動車教習所を開設したり、普通選挙施行後初の選挙で市議会議員に当選したり、アセチレン灯の青物夜市を湯殿山神社門前で行ったり、まさに八面六臂(はちめんろっぴ)の活躍ぶりでした。その辺のことは元山形新聞記者の田中邦太郎さんが、季刊『やまがた街角』に書いておられます。

昭和10年50歳で他界。2代目となる妻とみさは、「紅花劇場」をはじめ、「山形銀映」、「霞城館」、「千歳座」に加えて「よねざわ映画劇場」、「鶴岡東宝」を経営し県内主要都市に7つの映画館を持つに至る女傑。3代目の父健は昭和30年に「旭座」を取り壊して、民間の建築物で県内初の鉄筋コンクリートのビル「シネマ旭」を建設しました。2スクリーン各400席で東北最大の規模で、「映画のまち山形」を象徴する建物でした。

4年前、映画ファンや市民の方々に惜しまれながら「シネマ旭」を解体しました。しかし、ありがたいことに、館が消えても通りは今も「シネマ通り」と呼ばれ、リノベーションによるまちづくりの“愛称”となっています。そして今、山形市は、ユネスコの創造都市ネットワークに、国内で初めて映画分野での加盟を申請しています。

この機会に映画産業の草創、全盛それぞれの時代を生き抜いた創業者たちの事にふれてみた次第です。
(山形商工会議所評議員)



今月の表紙 「七日町御殿堰周辺」

ふるさと画家・上野啓太氏作。「わが町」をテーマに、イラストでまちおこし運動を行っている「やまがたマーチング委員会」(事務局・株大風印刷)提供。